評価方法とは異なりますが、猫の外傷患者に対して外科手術を要した患者を考察した論文になります。

コロラド州立大学に受診した猫の外傷患者251例の内、手術群89例(35%)、非手術群162例(65%)であり、手術群の内、58例が救急治療室(ER)での手術、31例が手術室(OR)での手術であった。ER群では穿通性外傷に対する創傷処置(69%)が主体であり、OR群では鈍的外傷に対する整形外科・口腔外科手術(64.5%)が主体に行われた。

＜結果＞
①生存退院率：手術群99% vs 非手術群73.5%。その内、安楽死はER群1例(1.7%)、OR群0例、非手術群36例(22.2%)であり、費用面、予後不良もしくは両方が原因であった。
②ATT Score：外傷による重症度スコアであるATT Scoreは、ER群は中央値1(0-8)であったのに比べ、OR群は中央値3(1-12)と有意に高い値であった。非手術群は中央値2(0-18)であり、OR群と同様な結果であった。生存群(中央値2[0-12])と比べ、非生存群(中央値8[2-16])は有意に高い値を示した。また頭部外傷の神経学的評価であるMGCSに群間差は認められなかった。
外傷患者には緊急手術を想定してトリアージを行わなければならない一方で、整形外科疾患を有する鈍的外傷は重篤度が高いことが多いため、初期治療を正確に行い、外科医へ安定化した状態で引き継ぐことの重要性が再確認できました。